

## 吐瀉物 佐藤博之

明治期以来、旧来の和歌に比較して短歌は多くの言葉を選び、その表現の幅を拡げてきた。この語彙の自由さは短歌の大きな魅力である。だがその短歌の魅力である自由な語彙選択の中から、意識的に避けられてきた言葉もある。中でも特に、直接的に汚物を詠むことは憚られてきた。

しかし最近、その汚物の中でも二十代から三十代の若い歌人に詠み込まれる様になったものがある。吐瀉物である。嘔吐物・反吐・ゲロと多様な言い方のある言葉ではあるが、歌に詠まれるのは「吐瀉物」である。

・吐瀉物を巧みに避けていく足は聖夜渋谷の公園通り

平井俊「現代短歌」2021・9

華やかな繁華街である渋谷の中心地、しかも聖夜という華やかな日程に吐瀉物を詠むことで、祝祭感との表裏とも云えるその華やかさの影にある人間の業、むしろ必然的に存在する汚らしい吐瀉物からの展開で聖夜の華やかさを強調する。

・吐瀉物にまみれ「抱っこ」と泣く息子どちらかといえば理性に  
て抱く  
奥村知世『工場』

育児の中で子供は、尿や便を漏らしたり嘔吐したりする。その嘔吐し、吐瀉物にまみれた息子を抱くのは「理性」と語る冷静さと親としての責任感を詠む。しかもそれを「どちらかといえば」と大上

段に振りかぶらずに言うところが面白い。

・吐瀉物でひかるくちびるいつの日かわたしを産んで まだ死な  
ないで  
藤宮若菜『まばたきで消えていく』

独特の耽美的な歌風の藤宮。歌集を貫く「死」というテーマの中で、死との対比する願望の訴えの前提として、生のリアリティを象徴するものとして吐瀉物が提示されている。この一首では吐瀉物のひかりに、呼びかける対象者への生への願望の強さを感じることが出来る。

・男性の吐瀉物眺める昼下がりカニチャーハンおれも食いたい  
佐佐木定綱『月を食う』

他人の吐き残した吐瀉物を真正面から観察し、内容分析から食べた内容を推察して「おれも食いたい」と表明する。これまで美しいとされてこなかったものを多く詠み込んで、清濁ありのままの人間像を描き出すとする佐佐木の代表作。他、この歌集には「君の排泄物とぼくの吐瀉物を引き合わせろよ下水処理場」と、壮絶な相聞歌がある。下水処理場の中の排泄物と吐瀉物の混交という愛の叶え方は斬新で、強いて言うところ激しい変態的な情熱を感じる。

これまで見てきた様に、吐瀉物を詠み込んだ歌が最近多く発表されている。概ね吐瀉物についての汚らしさだけではなく、その生命感をよりリアリティを以て訴える素材として、歌人それぞれの抱えるテーマにうまく活用されている様に感じる。既存の歌語や詩情の範疇を拡げていくモチーフの選び方の挑戦には大いに賛同する。吐瀉物以外にも幅広い歌材に向き合っている様、視野を広げていきたいと思う。